

水稻品種「キヌヒカリ」の晩植における栽培法

1. 試験のねらい

水稻品種「キヌヒカリ」について、晩植における栽培特性（基肥量、追肥時期）および収量性を検討し、安定栽培に寄与する。

2. 試験方法

試験は栃木農試水田（厚層多腐植質多湿黒ボク土）において平成3年～4年の2カ年実施した。平成3年栽植密度を22.2株/㎡とし、基肥窒素を2・4・6kg/10aの3水準、穂肥時期を出穂前25日+10日、20日および15日の3水準とした。平成4年は基肥窒素2kg/10a区では穂肥時期を出穂前20日および15日の2水準とし栽植密度20.8株/㎡で、基肥窒素4kg/10a区では穂肥時期を出穂20日及び15日の2水準とし、出穂前20日の区の栽植密度を20.8及び23.3株/㎡の2水準とした。出穂前15日の区は栽植密度20.8株/㎡である。さらに、側条施肥区を設けた。基肥窒素を2及び3kg/10aの2水準とし、栽植密度20.8株/㎡、穂肥時期出穂前20日で実施した。なお、2カ年とも移植時期は6月18日とした。

3. 試験結果および考察

- (1) キヌヒカリはコシヒカリに比べ稈長が短く耐倒伏性が優り、基肥窒素レベルを上げることにより多収となった。
- (2) 晩植におけるキヌヒカリは、穂数と総籾数・収量・倒伏との相関が高く、また、総籾数と収量の相関も高かった。従って、安定して倒伏を抑え収量を向上させるには、穂数340～350本/㎡、総籾数28,000粒/㎡程度が適当であり、年次間差はあったが収量は510～580kg/10aが期待できる。
- (3) 基肥窒素量は2kg/10aでは穂数が300～320本/㎡で少なく、6kgでは倒伏が多いことから、3～4kg/10aが適当である。
- (4) 穂肥時期は、基肥窒素4kg/10a区では穂数、総籾数が増加したが、登熟歩合が減少し、玄米重に差がなかったことから出穂前20～15日が適当である。また、基肥窒素2kg/10a区では早い時期の追肥により総籾数、玄米重が増加し、出穂前30日の生育量が少なく、草丈(cm)×莖数(本/㎡)の値が28,000以下の場合には、早め（出穂前25及び10日）の追肥が有効である。
- (5) 密植（23.8株/㎡）と疎植（20.8株/㎡）による差はほとんど見られなかった。
- (6) 側条施肥区は最高分けつ期までの生育は他区に優ったが、成熟期の収量関連形質は植代時施肥の同じ基肥窒素量の区と同様であったことから、緩効性肥料入りの側条用肥料を使用する場合、基肥窒素レベルは植代時施肥と同じレベルでよい。
- (7)刈取適期は出穂後57日前後と判断され、帯緑色籾率10～15%、出穂後の積算温度1,100～1,200℃を目安とするが、刈遅れると品質低下を招く恐れがあるので注意する。

4. 成果の要約

水稻品種「キヌヒカリ」の晩植における適正生育量は、穂数 340~350本/㎡、総粒数 28,000粒/㎡であり、収量は 510~580kg/10a が期待できる。栽培法は基肥窒素量 3~4 kg/10a。穂肥時期は出穂前 20~15日 が適当である。刈取適期は出穂後 57 日前後と判断され、帯緑色粉率 10~15%、出穂後の積算温度 1,100~1,200°C を目安とする。

(担当者 作物部 小林俊一・福島敏和・山口正篤)

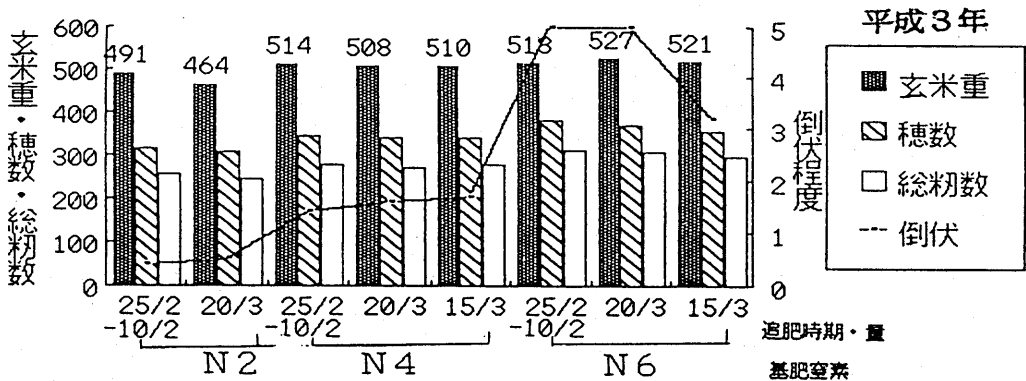


図-1 玄米重、穂数および総粒数 (ノ100)

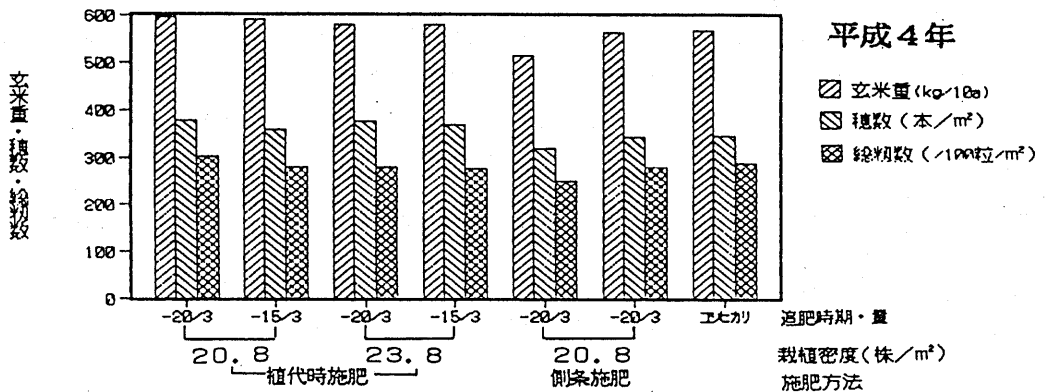


図-2 施肥方法および栽植密度と収量の関係

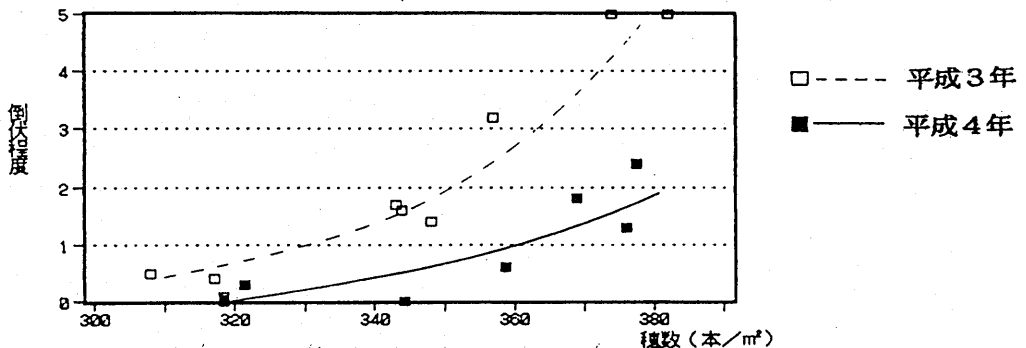


図-3 穂数と倒伏程度の関係